

令和 5 年 6 月 19 日現在

機関番号：32682

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2022

課題番号：20K13064

研究課題名（和文）抜き出しの可能性に基づくso照応に関する比較統語論的研究

研究課題名（英文）A Comparative Syntactic Study of So Anaphora: A View from Extraction Possibilities

研究代表者

坂本 祐太（Sakamoto, Yuta）

明治大学・情報コミュニケーション学部・専任准教授

研究者番号：40802872

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、「so照応」（英語の例：Mary kissed Bill, and Nancy did so too）（日本語の例：メアリーがビルにキスしたら、ナンシーもそうした）に焦点を当て、「なぜ照応現象は音声的に不完全にも関わらず、母語話者は一様の解釈可能性及び統語的特性を示すのか」という問題に取り組んだ。具体的には、so照応が示す抜き出しの可能性に関するパターンを比較統語論の見地から言語横断的に記述検討することを旨とし、現在の生成文法理論の枠組みにおいて当該のパターンを説明する理論を構築し、理論言語学の中心的課題の一つである「ヒトの言語知識の解明」に貢献することを目指した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本語のso照応が示す抜き出しの可能性に関するパターンは、一般的な省略（例えば英語の動詞句省略）や代用形（例えば英語のdo so照応）には観察されず、移動の種類を考慮に入れた上で省略と代用形の違いをより経験的に精緻化する必要性及び当該のパターンを説明する理論構築の必要性が浮き彫りとなっていた。そこで、本研究では、自然言語に観察されるso照応を言語横断的に記述し、比較統語論の手法を用いながらその抜き出しに関するパターンを比較検討し、ヒトの言語知識（普遍文法）の内実に迫ることを目標とした。

研究成果の概要（英文）：In this research, I investigated what has been called so anaphora in natural languages, especially in English and Japanese, aiming at resolving why anaphora involves phonological incompleteness on the one hand but it provides us with uniform interpretations and syntactic properties on the other hand. To be more specific, I tried to cross-linguistically describe extraction possibilities out of a so anaphora site, aiming at creating a theoretical apparatus that can account for the extraction possibilities in question within the framework of generative syntax, and also tried to contribute to understanding our knowledge of language, one of the important issues in theoretical linguistics.

研究分野：言語学

キーワード：生成文法 統語論 照応 移動

1. 研究開始当初の背景

本研究の背景には、照応という現象を通してヒトの言語知識およびその基盤となる普遍文法の仕組みの解明に貢献するという意識がある。これまで申請者は、英語を中心とした印欧諸語における照応現象に関する研究を、それらの言語とは類型論的に異なる諸特徴を有する日本語などの言語に応用することで、新たな知見を多く得てきた。しかし、研究を進める中で「なぜ自然言語における照応現象の中で抜き出しのパターンが一様ではなく、言語間及び言語内で多種多様な差異があるのか」という問いが生じ、より詳細な記述研究と理論的説明の必要性が浮き彫りとなった。申請者の知る限り、so 照応を言語横断的に抜き出しの可能性の観点から記述検討する研究は先行研究において存在していない。そこで、今後 so 照応に関する詳細な理論的研究及び記述的研究を行い、その本質を明らかにすることが理論言語学のさらなる発展にとって重要であるという着想に至った。

2. 研究の目的

本研究は、先行研究において中心的に研究されてきた照応現象において、so 照応の抜き出しに関するパターンを言語横断的に記述検討するという新たな試みを通して「なぜ照応現象は音声的に不完全であるにも関わらず、母語話者は一様の解釈可能性及び統語的特性を示すのか」という問題に取り組むものであった。この点で、本研究は従来の照応現象研究にはない研究成果が挙げられると考えた。例えば、英語と日本語以外の so 照応が示す抜き出しのパターンを詳細に記述することで、so 照応が伝統的な代用形として振る舞う言語と振る舞わない言語の差異をどのような統語的特性に帰すことができるのか明らかになることが期待されることを考え（かき混ぜ操作の有無、一致の有無、膠着語か否かなど）、また先行研究では、個別言語における so 照応の統語的記述はなされているが、so 照応を言語横断的に抜き出しの可能性の観点から比較検討しているものは申請者の知る限り存在しないため、本研究が完成することにより得られる成果は、今後の照応現象の研究の際に参照または取り入れられると考えた。

3. 研究の方法

本研究の遂行に関連して、申請者はこれまで一貫して自然言語における照応現象の解明に取り組んでおり、先行研究においては主に東アジア諸語を中心とした項省略現象、日英語の名詞句省略現象、日本語の助詞残留現象などに関して理論的及び記述的研究を行ってきた。また、上記の研究を抜き出しの可能性の観点から行うことにより、照応現象の統語的及び意味的特性の解明、また広くはヒトの言語知識の解明に一定の成果を挙げてきた。当該の研究からこれまで得ることができた文献的知識及び照応現象に関する研究的手法は、本研究を遂行するにあたって大いに役立った。また、本研究のトピック

クである so 照応に関しては、英語の so 照応と日本語の so 照応に関して理論的及び記述的研究を過去に行っており、その研究内容は国内学会及び国際学会で既に口頭発表を行っていた。従って so 照応に関しても、理論的研究を進めていくための文献的知識及び研究的手法は持ち合わせており、本研究を遂行するにあたって、それらを活かすことができる考えた。

4. 研究成果

前述したように、本研究ではまず so 照応を言語横断的に調査し、その抜き出しのパターンに関して記述検討を行うことを目指した。具体的には、英語・日本語以外で so 照応を許す言語を広範に考察し、英語と日本語の so 照応が示す抜き出しのパターンが他の言語の so 照応においても観察されるか調査し、抜き出しのパターンと個別言語の特性を比較検討する中で、前者がどのような統語的及び意味的特性（例えば、かき混ぜ操作の有無、一致の有無、膠着語か否か）に還元されるのか考察した上で、照応形の統語的及び意味的特性の記述に新たな観点から貢献することを目指した。しかしながら、新型コロナウイルスの影響により海外への渡航が困難になったことが主な理由となり、当初予定していたような成果を挙げるができなかった。しかしながら、文献調査により韓国語の so 照応が日本語の so 照応と同様の統語的特性を示すことや、予備研究で行っていたドイツ語の es 照応に関してやはり日本語の so 照応と同様の性質を示すことを明らかにすることができ、その成果の一部は 2020 年度に日本言語学会で口頭発表を行った。

また、本研究では so 照応が示す抜き出しのパターンを説明する理論構築に関しても行うことを目的としていた。研究計画書に記載したように、Aelbrecht が提案する派生的音韻素性削除理論の下での so 挿入分析、および so の補部に構造を持たせた上で当該の補部を削除する二つの分析の比較検討を行い、ミニマリスト・プログラムの下でどちらの理論がより妥当性が高いか検証を行った、具体的には 2022 年度末に米国コネティカット大学を訪問し、Željko Bošković 教授と議論する中で「省略現象が従来随意的な操作である」ことを踏まえると、前者の分析の方がその特性をより自然な形で捉えることが可能なのではないかという結論に至ることができた。より具体的には、後者の分析では省略を義務的にかけないと非文法的である文を作り上げてしまう点に理論的問題点が生じるのではないかという議論を行った。今後の研究を通して、上記の潜在的な理論的問題点が妥当なものであるか検証を行っていく予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Sakamoto, Yuta	4. 巻 -
2. 論文標題 NEG-raising via Proform	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Linguistic Inquiry	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Sakamoto, Yuta	4. 巻 98
2. 論文標題 Review: The Elliptical Noun Phrase in English: Structure and Use	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Eibungaku Kenkyu	6. 最初と最後の頁 151-160
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Sakamoto, Yuta	4. 巻 55
2. 論文標題 Elliptic Do So in Japanese	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Proceedings of the 55th Annual Meeting of the Chicago Linguistic Society	6. 最初と最後の頁 365, 380
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 Yagi Yusuke, Yuta Tatsumi, and Yuta Sakamoto
2. 発表標題 Against syntactic NEG-raising: Evidence from polarity-reversed ellipsis in Japanese
3. 学会等名 Japanese/Korean Linguistics 29 (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Sakamoto, Yuta
2. 発表標題 NEG-raising via Proform
3. 学会等名 The 56th Annual Meeting of the Chicago Linguistic Society (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 坂本祐太 戸川琴貴
2. 発表標題 ドイツ語における3人称中性代名詞esに関する研究
3. 学会等名 日本言語学会第160回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Sakamoto, Yuta
2. 発表標題 Apparent VP-ellipsis in Japanese: An Argument Ellipsis Account
3. 学会等名 Japanese/Korean Linguistics 28 (国際学会)
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 Sakamoto, Yuta	4. 発行年 2020年
2. 出版社 John Benjamins	5. 総ページ数 266
3. 書名 Silently Structured Silent Argument	

1. 著者名 松岡 和美、内堀 朝子	4. 発行年 2023年
2. 出版社 くろしお出版	5. 総ページ数 292
3. 書名 手話言語学のトピック：基礎から最前線へ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------